

書 評

ジャーナリズムは生き残れるか —米報道編集局の内幕—

(原著 David M. Ryfe, *Can Journalism Survive? An Inside Look at American Newsrooms*, Wiley, 2012)

大 井 眞 二*

はじめに本書の目次を掲記する。

序 章：挑戦 ジャーナリズムの文化 習慣・投資・定義 本書の要約

1 章 背景：衰退する産業 オーディエンス減の理由 産業の対応 変化する文化

2 章 習慣：実験 ビート報道（ビートの習慣） その実際 「これが問題」 組織の文化

3 章 投資：新聞改革計画 ジャーナリズムのフィールドと新聞 TV ジャーナリズムの再生
「新聞の試み」「新聞人ということ」

4 章 定義：スーパーブロギング（Superblogging）の実際 ジャーナリズムモデルとしての
スーパーブロギング 「それでも記者」

5 章 将来：もつれた糸をほぐす 負のサイクル

6 章 懸念：ジャーナリズムとデモクラシー 懸念 対応 ネットワークジャーナリズムとデモ
クラシー 一種の革命

結 論

社会学者にして必ずしも米ジャーナリズム界のインサイダーではない筆者にとって、米ジャーナリズムは二つのいわば集団的トラウマとでもいうべき病に罹患していると思われるようだ。要約して言えば一つは集団的パニックとでもいうべきもので、他はデジタルメディアに対するアンビヴァレントな感情とでも言おうか。本書は主として前者を扱っているが、精読すれば了解されるように、上記の双方を俎上している。

刺激的なタイトルを掲げて筆者が懸念しているのは主として米日刊紙の惨憺たる状況であり、それはまさしくその通りであり論を待たない。評者は数年前まで『日本新聞年鑑』で年1回「北米新聞の概況」を執筆し、ながく米新聞業界の深刻化する窮状をレビューしてきた。本書の指摘は評者が「概況」を担当していた時代からあったことで、例えば中小の都市部では日刊紙が徐々に週3刊紙や週刊新聞へと、あるいはウェブサイトへと転換し、まさにかなり前から氣息奄々といった状況になっていたのである。もちろん筆者はそうした経緯を等閑視しているわけではないし、1970年代に書かれたいくつかの新聞社のエスノグラフィーをノスタルジックに回顧しているわけでもない。筆者はもっと狭い焦点化を試み、生き残りにかけた興味深い実験を試みている3新聞社（3紙の発行部数は4万4千から17万）を研究対象に選び出した。

*おおい しんじ 日本大学法学部新聞学科 教授

最初の実験は、これまで出来事中心であった従来のニュース取材報道の方法を、都市部の読者をひきつけるようなコンテキスト中心のストーリーに切り替える試みであり、報道編集局挙げての取り組みであった。第二は、それほど新奇なものではないが、TVがますます主たるメディアになっている状況に対して、新聞をマルチプラットフォームにする試みであった。第三は一種のパブリック・ジャーナリズムの試みであって、ジャーナリストを「superbloggers」にする野心的な実験であった。

ここで3紙の成功を報告できれば、書名は大きく変わっただろう。もっと多幸症的なものに。辛口に過ぎた。残念ながら3つの実験はすべて失敗に終わったのである。筆者のエスノグラフィーは、失敗の内幕、それもプロフェッショナル・ジャーナリズムの基本的な問題とでも言うべきものを抉り出している。3紙のジャーナリストはこれらの実験をなんとか成功に導くよう努めるが、米ジャーナリズムの基本的な専門性、プロフェッショナルリズムにドラステックな変革をもたらすであろう実験となると、抵抗をしめすことになる。そうしたジャーナリストの在り様を描き出すため、筆者はエスノグラフィックな研究方法を採った。事実失敗を語る筆者の語り口は、対象に対するシンパセティックな感情を抑えながら、一定の距離をとって対象に迫るある種の迫力さえ感じられる。

筆者は別の角度からも失敗の説明を試みている。新聞社編集幹部の改革にかけるリーダーシップの不足、米新聞社が常にさらされている人員や編集予算の削減の圧力などは、米新聞界を注視してきた評者からすれば、すぐに想起できる、失敗につながるであろう要因、宿弊である。それらもさることながら、筆者はいわばジャーナリズム文化の分析を試みており、これは傾聴に値する。ジャーナリストの心の習慣とでもいうべき生活の方法、キャリアパスの在り様、ジャーナリズム教育、米ジャーナリズムが墨守する価値規範などが米ジャーナリズムが機能不全に陥った理由となれば、「ジャーナリズムは生き残れるか」どころの話ではなくなるのである。

本書の別の側面に眼を転じよう。かなりの分量を割いてネットワーク化されたニュース、つまりデジタル・ジャーナリズムの現況について報告している。筆者がそこに見出しているのは、終わりの始まりではなく、始まりの始まり、ジャーナリズムが生き残れるであろう変化の長期的な過程のいわば端緒とでもいうべきものであって、それ故「生き残れるだろう」という希望的観測になるのである。

評者はそれほど多幸症的展望を持ち合わせていないが、残る紙幅をつかって論じたいのは、本書によって大きな刺激を受けた研究課題である。翻訳は生涯やらぬと思いついていながら、現在関わっている翻訳作業がある。米ジャーナリズム史学で一時代をなし、半世紀以上にわたって版を重ねたEdwin Emery 他著『Press and America』（邦訳題『米報道史』を予定）である。原著者がすべて物故し、再版の見込みなき一書である。最新版は2000年代で終わり、監訳者と筆者は、その後の米ジャーナリズム史をエピソード仕立てで補遺として翻訳作業に加えることにした。本書を読み、件の翻訳及び補遺作業を重ねてみると、原著者が物故した後の米ジャーナリズム史をどのように捉えたらいいのかという問題が浮上する。それは筆者が可能性を見出しているデジタル・ジャーナリズムの歴史とでもいおうか。歴史を描くには熟していない課題であることは言わずもがなであるが、デジタル・ジャーナリズムの勃興によってドラステックな変化が起こったとするなら、そうした変化の端緒（包括的歴史は無理としても）だけでなく、伝統的なジャーナリズムに大きな影

響を与えた技術的だけでなく経済的要因まで踏み込んで、さらにデジタル時代とともに始まった消費者向けの情報サービスやパッケージまで視野に入れた歴史的研究に踏み出すドンキホーテ的試みが必要とされるだろう。冒頭に集団的パニックについて触れた。今米ジャーナリズムは、生き残りの模索に付きまとうパニック状態に陥っているという筆者の見立てである。改革のための十分な経済的資源を欠き、政治ジャーナリズムの衰退現象がささやかれ、プロフェッショナル・ジャーナリズムのスキルが有名無実化し、新旧ジャーナリズムの収斂現象が進行する中でパニックが起きているとするなら、その病理を解明する努力が必要である。

次なる問題はニュース・オーディエンスである。いまやグローバルに進行する若きオーディエンスのいわゆる新聞離れをはじめとして、若いオーディエンスのニュースを中心とした情報行動の変容はジャーナリズムにとって容易ならざる問題である。若いオーディエンスはニュースを読むというよりむしろ利用して（あるいは楽しみながら）、自身に直接関わる（と思っている）、自身が監視することができない環境について報告する。デジタル移民の評者から見れば、彼ら／彼女らのそうした行動は、広大無辺のデジタル空間をディズニーランドさながらの遊び場に転じ、様々な遊びに興じているようにさえ思える。しかし他方で若きオーディエンスは、災害やスキャンダル、あるいは自身の日常生活を脅かしかねない他の脅威についてのニュースを求めており、伝統的なフォーマットであれデジタルのそれであれ、そうしたニュースを欲しているのである。TVネットワークの朝や晩のニュースは、そうしたニーズにこたえ、ケーブルやラジオのニュースも異なるフォーマットで対応しているように思われるのである。

こうしてみると、集団的パニックに罹患しているのは新聞ということになるだろうか。何故新聞にそれが克服できないのだろうか。新聞がキャッチオールメディアであった時代はとうの昔に過ぎ去った。新聞の危機が叫ばれて久しい。危機を伝えるために繰り返され乱打される警鐘はいまや摩耗し、打ち捨てられてしまったような感がある。しかし本書は、役割を終えた警鐘に代えて新たなそれを鑄造し、打ち鳴らしているように思えるのである。本書の70年代のそれとはまったく異なる新聞のエスノグラフィーは、急速に変化するデジタル環境において、改めて伝統的な新聞ジャーナリズムが内面化し、プロフェッショナルリズムの規範として奉じてきた基本的価値すらも疑問にふし、誰のための、何のためのジャーナリズムを突き詰めて問い直し、実践する必要を警鐘として打ち鳴らしている。新鮮な響きをもっているうちに、今一度、耳を傾けたい。